

## 大鹿村民俗資料館「ろくべん館」のありかたについて

当初、文化交流施設という位置づけで施設改修事業が計画されてきたが、内容の検討を進める中で文化交流事業（ソフト面）、文化交流施設（ハード面）のあり方に対し、基本的な概念があいまいで定まっていないとの指摘がされてきた。

隣接する中央構造線博物館には南アルプスジオパーク中央構造線エリアの（大鹿村における）拠点施設としての位置づけがあり、専門の学芸員が常駐して研究資料の収集・保存・展示等を行いながら世界的なネットワークの一翼を担っているが、民俗資料館としてのろくべん館は取り組みの範囲が主に村内限定であり、外部とのネットワークを特に意識したものではなかった。

同時に南アルプスユネスコエコパーク大鹿村エリアには現在活動拠点となる施設がなく、またその意義や活動に対する村民の認識もあいまいで取り組みが弱いのが現状である。

そこで、これまでの民俗資料館としての機能や文化交流事業としての取り組みを包含する形で、ろくべん館をユネスコエコパーク大鹿村エリアの拠点施設と位置づけ、村民がエコパークとは何なのかを学びながら活動できる施設として運営を進め、ユネスコエコパークとしてのネットワークを生かした取り組みを展開していったらどうだろう、ということ協賛会に提案させていただきたい。

「ユネスコエコパーク」（正式名称：生物圏保存地域 Biosphere Reserves BR）は、「自然保護と地域の人々の生活とが両立した持続的な発展を目指す、世界のモデルとなる地域」の事である。南アルプスエコパークは、「南アルプスの高い

山、深い谷が育む生物と文化の多様性」が高く評価され、2014年日本で6番目にユネスコに承認・登録された。しかし、これまで大鹿村においてはエコパークへの取り組みに関してあまり知見がなく、何をしたらよいかわからない、ということではほぼ手付かずの状態であったと言える。

今年度は第5次総合振興計画を策定し、次の10年間の村づくりの方針を定める節目の年であるが、ユネスコエコパークが目指す将来像をそっくりそのまま今後の村づくりの基本方針の一つとして明確に位置付けていきたいと考えている。またその精神はSDGsとも一致するものである。

『南アルプスと中央構造線がつくり出す地形に育まれた多様な自然環境や文化の価値を自ら学んで知り、これらを大事に守りながら幸福に暮らすことで、持続可能な世界の発展に貢献する』ことをエコパーク大鹿村エリアの目標として、また大鹿村の村づくりの目標として取り組みたい。

ろくべん館の在り方としても、これまでの民俗資料の展示に加え、ユネスコエコパークについて学ぶことができるスペースを作り、村民や観光客等がエコパークってそもそも何？というところを学びながら展示された民俗資料や大鹿村のフィールド（自然環境・文化歴史）をどう生かしていったらよいか考え実行する出発点となる場所としたい。

またこの施設は同時に南アルプスや村内の里山で登山利用する人たちの情報発信・管理の場＝ビジターセンターとしての機能も果たすことができると考える。